
アナログ改

あそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナログ改

【Nコード】

N2426P

【作者名】

あそ

【あらすじ】

2015年。

新排気ガス規制、エコカー減税により古き良き名車達は次々にスクラップにされた。
メーカーのラインナップからはスポーツカーが無くなりハイブリッド車が大半を占める。

- もう俺達の時代じゃないのか? -

そんな車好きにとって逆境の時代となった昨今。

麻生と加野はそれでもサーキット走行を楽しんでいた。

その帰りのことだった。

東海地震発生。

一瞬にして景色は地獄絵図へと変貌する。

実在の人物達で構成される「走り屋×自然災害」の物語。

m i x i アプリの携帯小説で執筆した「アナログ」の再執筆です。

麻生編

- 2020年 南港刑務所 -

「さつさと入れ!!」

看守は田中の腕を掴むと強引に檻の中に押し込んだ。
扉を閉められると田中はこれからの人生を考えて落ち込んだ。

こんな狭くて暗い折の中に10年…。
私の人生終わったも同然じゃないか…。

田中はその場に座り込んだ。

派遣社員で働き続けて気づけば40手前。
就職難は終わりが見えなかった。

食う銭に困った田中は空き巣を繰り返した。
その数16件。

最後の仕事がまずかった。

その家は留守ではなく子供が1人いたのだ。
ビックリした田中はその子供を殴りつけて逃げてしまった。

窃盗罪だけでなく傷害罪もついていた。

人を傷つけることはすまいと誓っていたのに…。

「おい。」

狭くて暗いこの部屋に田中以外の声が響いた。
田中の背筋が一気に冷たくなった。

私以外に誰がいる！？

田中は後ろを恐る恐る振り返った。
そこには30くらいの小汚い男がいた。

長髪で無精髭が生えている。
だが、筋肉質で力強い瞳をしている。

「あ、あんたは…？」

「……俺は赤下。あんたは？」

「私は田中と言います…。」

赤下と名乗るこの男。

一体どれくらいこの檻の中にいるのだろうか？
着ている囚人服は擦り切れてボロボロだ。

ふと、田中は思った。

赤下と言う名前には聞き覚えがある。

『2015年の比叡山爆破事件』

ベクターレーシングという暴走族の集団が比叡山を爆破したテロ事

件だ。

麻生という男が主犯となり、他には加野、赤下と言った何人かの仲間がいたはずだ。

麻生と加野は死亡。

赤下は逮捕されて現在服役中のはずだ。

「ま、まさかベクターレーシングの赤下くんなのかい？」

田中は恐る恐る尋ねてみた。

赤下という名字はそんなにいないと思う。
だけでもできれば違っていて欲しい。

窃盗とかつまらない罪で服役してほしい。

だが、目の前にいる男は田中の期待を裏切る返答をした。

「……そうだ。」

ああ…。

田中は絶望した。

日本を壊滅にまで追い込んだテロリストと同じ檻の中で10年過ごせと言ったのか…。

「…俺達が悪だと思っつか？」

「…え？」

赤下は田中をまっすぐ見た。

「俺達は悪じゃない。俺達は……」

そうして赤下は語り始めた。

2015年の真実を。

「俺達は救おうとしたんだ……。」

始まり

- 2015年 柏原峠 -

「パアアアアアンツ！！！！！」

「ブアアアアアアアアア！！！！！」

「キイイイイイ！！！！！」

大阪と奈良の県境にある柏原峠。

ここでは夜な夜な爆音が響きわたった。

走り屋と呼ばれる者達の集まりである。

車高をギリギリまで下げて、爆音のマフラーを装着する。
端から見ればそれはただの暴走族だ。

だが暴走族とは決定的に違う点が彼らにはあった。
それは『速さ』を求めているということ。

- 誰よりも速く -

それが彼らの目標であった。

赤い車から一人の男が降りてくる。
その男こそ赤下だ。

赤い車はマツダのRX-7 FC3型。

「加野ちゃん速なったなあ！！」

車から降りてくるなり赤下は声を出した。
すると別の車から女性が降りてきた。

スズキのアルトワークス。

この車に搭乗するのは加野という女性だ。

加野は負けん気の強い男勝りな性格で、そこいらのヘタレな男よりも男らしい。

そんな加野を皆は女性だからと特別扱いはしない。
男女間を越えた仲間なのだ。

「赤下さんが遅くなってるんですよ！」
加野は笑いながら言った。

「アホ言え！！俺はいつでも最速や！！」

「射精も最速ですか！？」

「それは遅漏や！！！」

赤下と加野が下ネタで盛り上がっていると、峠の麓から改造車の排気音が聞こえた。

「何かあがってくるな。」

赤下は排気音が聞こえる麓を見た。

車のヘッドライトの光がもの凄い速さでこちらに向かってくる。

その光は瞬く間に赤下と加野を照らすところまで来た。

ホンダ サイバーCR-X。

1トンを切る車重に短いホイールベース。
コーナーを駆け抜けるために生まれた車だ。

「すみません遅くなって！」

CR-Xから降りてきた男が赤下と加野に声をかけた。

この男は麻生。

赤下、加野と共に柏原峠を走る仲間だ。

大のホンダ好きでVTECエンジンに憧れを持っているが
麻生の乗るCR-XはVTECエンジンではない。
低グレードの1500ccのキャブエンジンだ。

本人曰く「キャブなのがしぶいだろ。」と言うが
実のところはVTECエンジンを買うお金がないだけである。

「遅いわよ！」

加野に怒られる。

「いやあーごめんって！」

「そっぴや2人は明日はモーターパーク鈴鹿にご出勤か。」

赤下が言う。

モーターパーク鈴鹿とは三重県鈴鹿市にある小さなサーキットだ。麻生と加野はモーターパーク鈴鹿によく走行練習に行っている。

「ええ。どうせならベクターの皆で行きたかったですけど。」
麻生が言った。

ベクターとは麻生達を作った走り屋のチーム名だ。
他にも走り仲間が数人いる。

「おじさんは明日仕事やからな。」
赤下が言った。

ベクターでは最年長の赤下は自身のことをたまにおじさんという。
誰かから「おじさん」と言われると猛烈に批判するのだが…。

「まあせいぜい晴れることを祈るわ。雨男と一緒にだし。」

「あ、雨男って俺かあ!？」
麻生が自分を指さす。

そう、麻生が何かするときはいつも雨。
デートの日も、走行会も。

雨ばかりなのだ。

対して加野は晴れ女だ。

当日の予報が雨でも雲を蹴散らし晴れにする。
驚異の力だ。

この相対する二人が一緒に行動すると気象庁も悩むほど天候が分からなくなる。

麻生が勝って大雨になることもあれば
加野が勝って晴天になることもある。
引き分けになってグズグズの天気の時もある。

「明日はどっちが勝つんやろうな。」
赤下がニヤニヤしながら言った。

崩壊

翌日、二人はモーターパーク鈴鹿にいた。

「げえ！タイム負けてるし。」

麻生は走行終了後に配布されるタイム計測の表を見て愕然とした。

「51、32秒か。まだまだ削れるなあ。」

加野は麻生を無視して呟いた。

「やつぱVTECだ！VTECに載せ替えちやる！」

「はいはい。まずはお金を貯めましょうね。」

加野はたんたと片づけを始めていた。
ふと上を見る。

雲一つ無い晴天だ。
今日は私の勝ちか。

「今日は加野さんの勝ちだな。」

麻生も同じことを考えていたようだ。

「でも、なんだろうな？空はこんなにも青いのに嫌な感じがするんだよ。」

「嫌な感じ？」

「ああ。何か起こりそうな嫌な感じ。こつ…違和感を感じないか？」

「違和感って…？別に何も無いじゃない。静かで、綺麗な空。何も無いわよ。」

「…そうか。そうだよな。」

そうして二人は片づけを済ませてモーターパーク鈴鹿を後にした。

名阪国道に乗って大阪へと車を走らせる。

いつもと変わらない景色だ。

夕暮れで交通量の多い名阪国道。
オレンジ色になっていく山々。

俺の杞憂だったみたいだ。

昔から勘がいい方だったから嫌な感じとかがあると本当に嫌なことがあったりした。

俺の勘も鈍ってきたようだ。

時刻は午後5時32分。

日が落ちる前に帰れそうだ。

「バサバサバサバサバサ！！！！」

「うぁー！！」

突如、フロントガラスの視界が真っ黒になる。

その黒はボンネットからルーフまでもの凄い勢いで流れていく。

カラスだ…！

カラスの群がもの凄い勢いで飛んでいく…！

何かから逃げるように…！

一体何から？

動物達は五感が鋭く、人間よりも危機に気づくのが早いと聞いたことがある。

「……あ。」

違和感。

音がしなかった。

モーターパーク鈴鹿で。

なんにも音がしなかった。

いつも聞こえてくる虫や動物達の鳴き声が聞こえなかった。

胃液が大量に放出される。

即座にハザード。ブレーキ。

路肩に駐車。

逃げ逃げ逃げ。

瞳孔が見開く。瞬きするのを体が忘れてる。

カラスがどンドン南の方へ飛んでいく。

車から降りる。

カラスを見る。

我先にと飛んでいくカラス。

加野もアルトワークスを後ろにつけて歩み寄ってきた。

「なにこれ…？」

加野は風で舞う髪の毛を手で押さえながら言った。

「分からない…。」

二人はただ呆然とカラスを見つめるしか無かった。

・ズドン。

最初の衝撃はゆっくりと、静かに来た。

地面が揺れたというよりは自分の体が浮いた感覚だ。
一瞬無重力になった気がした。

絶望

。

うめき声が聞こえる。

一人じゃない。

沢山の人の。

うめき声が

聞こえる。

「はっ！」

麻生は目を覚ました。

体に痛みはない。

四肢は動く。大丈夫だ。

あれは地震だったのか？

大きすぎてよく分からなかった。

グラグラと揺れる地震ではない。

まるで地面の奥底で大爆発が起こったかのような地震だった。

加野を見る。

意識を失っているようだ。

「おい！起きろ！！」

麻生は加野を揺さぶった。

加野はうつすらと瞳を開けると、目に飛び込んできた景色に絶句した。

C R I Xとアルトワークスは地震の直前で停止した。
それが幸をそうして無事だった。

他の車は止まらなかった。

おかしいなと思いながらもそのまま帰路につこうとした。

そうして時速80キロで走る車体ごと地震の揺れを受けた。

衝突した車。

横転した車。

炎上した車。

トラックの下敷きになった車。

……まるで映画のセットの中だ。

「……あ……あ……。」

二人はただただその光景を見つめた。
呆然と見つめた。

「た……け……」

かすかに聞こえてくる助けを呼ぶ声。
誰も助けには来てくれない。

辺りは火の燃えたぎる音と、うめき声と、何かが崩れ落ちる音しかない。

普段ならどこに行っても聞こえてくる車の走る音。

それがまったく聞こえてこない。

麻生はユラユラと歩き出した。

車体から伸び出る手。

その手を握る。

その手は冷たかった。

「……あ……。」

死んでいる。

死んでいるのだ。

人が沢山。

死んでいる。

ズズズズズズ……

少し地面が揺れた。

余震という奴だろうか？

もしかしたらまた大きな揺れが起こるかもしれない。

二人がいる場所は山間に作られた橋の上だ。

今度地震が起きれば……橋が崩れるかもしれない。

前を見ると月ヶ瀬インターの出口が見えていた。

あちこちの車が障害物になりそうだが……行けないことはないだろう。

「か、加野さん……。逃げよう。」

麻生は月ヶ瀬インターを指さした。

「ち、近くにまだ生きてる人がいるわよ……？」

「は、橋が崩れるかもしれない……。」

「み、見捨てるの？」

「……………仕方ない……………と思う。」

うめき声が聞こえる。

聞き取ろうと思えば何と言っているか分かる。

でも、聞き取ろうとはしない。

聞いてしまえば罪悪感でいっぱいになりそうだから。

俺たちに何ができる？

何もできない…。

死を見届けてやることはできるかもしれない。

最後の言葉を聞くことができるかもしれない。

でもそうしてるうちに橋が崩れて俺たちが死んだら？

……。

麻生と加野は黙って車に乗り込んだ。

エンジンをかける。

バックミラーで加野の方を見ると何か言っているのが分かった。

加野はそのままアルトワークスから降りると麻生の元へと駆け寄った。

「どうした？」

「エンジンがかからないのよ…。」

「地震の影響か？」

「……分からない。」

「とりあえずC R I Xに乗れよ。近くで助けを呼んで戻ってこよう。」

そう、逃げる訳じゃない。
見捨てる訳じゃないんだ。

助けを呼びに行くだけ。

そう言い聞かせるために言った。

「……分かった。」

加野は回り込んでC R I Xの助手席に乗り込んだ。

麻生はゆっくりとアクセルを踏み込んだ。

名阪国道で動く車はこのC R I X 1台。

遠くの方までC R I Xの排気音が響いた。

そしてそれは絶望の中にいた人々を呼び起こした。

「た！！けて！！！！」

「けて！！！！こ！！！！」

「ああああ！！！！！！」

「たす！！！！！！」

「ここお！！！！！！ここお！！！！！！」

「た……けて！！！！た……けて！！！！！！」

辺りは一気に騒がしくなった。

もはや日本語ではない。

腹の底からわき出る助けを求める声無き声。

「……………」

麻生はただ、月ヶ瀬のインターだけを見つめた。

あんな……ぺしゃんこに潰れた車からどうやって助けろっていうんだ
！！！！！！

無理だ！！！！！！

無理なんだ！！！！！！

ステアリングを握る手がプルプルと震える。

麻生は思考を遮断した。

月ヶ瀬の出口に行く。

ただそれだけを考えて。

C R I Xはトロトロと進んでいった。

月ヶ瀬村

CR-Xは月ヶ瀬のインターから名阪国道を降りた。
一般道に出る。

二人とも言葉は発しなかった。
人が…血だらけで助けを求める。
その中を無言で駆け抜けた。

その罪悪感がずっと胸の中に残っている。

辺りは真っ暗になった。
ヘッドライトを点灯する。

地震の影響なのか街灯はどれも点いていなかった。

しばらく走っていると集落を見つけた。

「あ、村なのかな？」

月ヶ瀬の出口から無言だった加野が初めて口を開いた。

「数件、家が並んでるな。行ってみよう。」

麻生はCR-Xを止めた。

懐中電灯を持ち、車外に出た。

その集落は古くからそこにあっただかのように、
まるで時代劇の中に登場する村のようだった。
農業機具は近代の物で、麻生達がタイムスリップした訳ではないこ

とを物語っていた。

集落の中を歩いていく。

「ひつ！」

加野がいきなり悲鳴を上げた。
麻生もびくつく。

「な、なんだよ!？」

「今、そこで何か動いた……！」

加野は農業機具の置かれた倉庫の奥を指さした。

麻生は懷中電灯を向けて様子を見る。

何もない。

「何もいないじゃないか。ビビリやがって。」

「ビビってなんかないわよ！」

普段は勝ち気な加野でもこういうホラーなシュチュエーションは怖いのだなと麻生は心の中で笑った。

と、突然、目の前に懐中電灯で照らされた少女が現れた。

「うわあ あああああ！！！！！！」

麻生は叫んだ。

少女は麻生と加野を交互に見つめ、微笑んだ。
どうやら人間らしい。

「ビビリやがって…」

加野はぼそつと呟いた。

「……。」

麻生は少女を見た。

見た目は15歳くらいに見える。

短い黒髪で大きな瞳。

今でも十分可愛いが大人になればさぞモテるだろうなと思った。

俺はロリコンの気は無いからな。

「ここの人かな？」

加野は少女に尋ねた。

「うん。」

「そうなんだ。大人の人はいるかな？」

「……こっち。」

少女は見知った土地をスタスタと歩いていく。

麻生と加野は少女の後を追った。

やがて、一軒の家の前に来た。

やはり木造で、古き良き日本の家屋と言った感じた。

少女は扉を開けて中に入っていた。
続けて麻生と加野もお邪魔する。

「失礼します。」

中はほのかに木の香りがして暖かった。
奥の暖炉が優しく燃えている。

部屋にはイスに腰掛けた老人がいた。
少女はその老人の元へ駆け寄った。

「ユウキ、おかえり。」

老人は少女をユウキと呼んだ。

「あの…。」

加野は老人に声をかけた。

「なんじゃいあんたらは？」

「加野と麻生と言います。さっきの地震から逃げてきて…。」

「あー、さっきのね。えらいおつきかったねえ。」

老人はユウキの頭をなでながら言った。

「名阪国道で沢山の人が車に挟まれて動けないんです。助けたいんですが…。」

麻生が発言した。

「……。」

老人の顔つきが厳しくなった。

「助けるって…どうやってだい？」

「そ、それは…救助を呼んで…。」

「地震が起きたのがここだけでも思ってるのかい？今は各地で助けを求める人がごった返してるんだ。救助が来れるならとっくに來てるはずさ。」

「そ、それはそうですが…。」

「あんたらは自分が罪悪感を感じないようとにかく行動をしたいんだろ？やめときな。無駄だ。」

「いいかげんにしてください！！」
加野が叫んだ。

部屋が静まりかえる。

加野と老人は互いににらみ合った。

「……ふん。」

老人はイスに座り直して背を向けた。
暖炉に木を投げ入れる。

「……そんなことよりも。」

老人が呟いた。

「そんなことよりも自分が明日も太陽を拝めるように行動しな。そう言いたいんだよ。自分が特別だと思わんようにな。」

麻生と加野は顔を見合わせて黙り込んだ。

…確かに地震は名阪国道だけで起こった訳じゃない。
今は色んなところが混乱しているんだろう。

名阪国道で気を失って、たぶん1時間くらいはあそこにいたと思う。
だけど救急車やパトカーのサイレンの音はまったく聞こえなかった。
救助は期待できないのだろうか…。

俺達も今後どうなるか分からない。
また地震が起こるかもしれない。
そうしたら今度は俺達が死ぬのかもしれない。

そうならないために行動しろ。
後ろを見るな。

老人はそう言いたかったんじゃないだろうか？

「もう夜だ。何も出せやしないが止まっていきな。」
老人はそう言うときまた木を暖炉に投げ込んだ。

決壊

あの地震から一夜が空けた。

ユウキに聞いたところこの集落は月ヶ瀬村というそうだ。
月ヶ瀬村には40人ほどしか村人がいないそうだ。
みんな農業や林業で食べていつてゐるらしい。

「おはよう。」

加野も起きてきたようだ。

「おはよう。」

麻生は挨拶を返した。

空は昨日と同じで晴天だ。

まるであの地震が嘘だったかのように思える。

「どうする？これから？」

加野が聞いてきた。

恐らく名阪国道は倒壊したり破損した車ばかりで通ることはできないだろう。

復旧作業や救助、被害はどれくらいなんだろう？

とにかく情報が欲しい。

「…あ。」

麻生は声を漏らした。

「な、なに？」

「カーラジオがあるじゃん！」

CR-Xについてるカーオーディオ。

ラジオも聞けるのだ。

なんでこんなことに気づかなかったんだろっか！

麻生と加野は急いでCR-Xの元へ駆け寄った。

エンジンをかけてカーオーディオをラジオに合わせる。

「…ピィ……東海地震……被害はなおも……機能せず……ガッ……ガ……」

そこでラジオからはノイズしか聞こえなくなった。

「山間部だから電波の入りが悪いのかな？」

「そうかもな。でも震源地は大体分かったな。起こる起こると言われていた東海地震がついに起こったんだ。」

「私たちは大阪に向かうから被害が少なくなっていくといいんだけど……」

「そうだな……」

大阪は東海じゃなくて関西だ。

きっと無事なはずだ……。

そう言い聞かせるしかない。

麻生はポケットからタバコを取り出して銜えた。
ライターで火をつけると車内にタバコの煙が充満した。

「あんたいいかげんにやめなさいよ。」
加野が煙たそうに言った。

やめよう！と思ってやめれたら苦労はしないんだがな…。
麻生は思い切り煙を吸い込んでニコチンが体内に入っていくのを楽しんだ。

フロントガラスから見える景色。
紅葉がかっていて綺麗だ。

やっぱり俺は都会よりもこういう田舎の方が好きだな。

ふと、集落のはるか上の山頂に目が止まった。
山頂に何かある。

なんだろうか？
コンクリートでできた大きな壁？

麻生はアタッシュケースからデジタル1眼レフカメラを取り出した。

麻生の車以外の趣味。
それは写真撮影だ。

車の走行写真を撮影したり友人の結婚式を撮影したり。
写真は人を喜ばせることができる。

喜んでもらえるところらもうれしいものだ。

300mmの望遠ズームレンズを選択して本体に差し込んだ。
サーキットで走行する車を撮影するのに重宝するレンズだ。
これで遠くの被写体を大きく撮影できる。

そうして麻生はレンズ越しに山頂を見てみた。

山頂のコンクリート部分が拡大されて見える。

「ダムか……。」

それは大きなダムだった。

見た感じ人はいなさそうだ。

視点を移動させる。

するとある異変に気づいた。

コンクリートの壁の一部分から水が勢いよく漏れ出している。

「……………」

地震の影響で壁に亀裂が入ったのか…。

「……………まずいぞ……！」

今は亀裂で済んでるから水はそこまで溢れ出てはいない。
だが、次に余震でも起きようものならあの壁は簡単に決壊するだろう。

それほどまでに壁には亀裂が入っている。

ダムから視点を下にやっていく。

調度……真下に月ヶ瀬村があった。

「か、加野さん！！急いで村人を集めるんだ！！」

麻生はCR-Xから飛び出して集落に向かった。

「え？え？ちよつと！！」

加野も後を追った。

麻生はまずあの老人に声をかけて村人を集めてもらうことにした。
元々40人ほどしかない村だ。

伝達は早く、1時間ほどで村人全員が集まった。

「なんじゃい？この忙しいときに。」

村人達は怪訝そうな顔をしている。

麻生はデジタル1眼レフで撮影したダムの写真を見せた。

「皆さん、あの山頂にあるダムが今にも決壊しそうなんです！」

「な、なんじゃいこりゃあ！！」

「せやからワシはダム建設に反対じゃったんじゃ……。」

ざわめきが起こる。

村人達はうるたえていた。

「で、どうする気なんじゃ？」

あの老人が麻生に声をかけた。

「ど、どうするって…逃げるしかないじゃないですか！」

「どこまで？どうやって逃げる？」

「う……」

この村にいる人達は大半が老人だ。

他は30代、40代など……子供は数人しかない。

この人達の体力ではそんなに長距離を歩くことはできないだろう…。
となるとやはり手段は車か…。

「車をかき集めましょう！乗れるだけ乗せて逃げましょう！」

「まあ……車は3、4台はあると思う。だがどこに逃げるんじゃ？」

……どこに逃げるかって言われても……俺はこの住民じゃない。
地理なんか分かるはずもない…！

「分かるわけないでしょう！？僕はここの地理は知らない！」

「……ふん。ちゃんと考えてから行動せえ。」

この老人の発言にさすがに力チンと来た。
けど今はケン力をしている場合ではない。

「……ワシが道案内してやる。」

「……え？」

「ここから農道を通っていけば名阪国道を使わずに西の方に抜けれるんじゃ。」

「お、おじいさん……！」

「ほれ！！さつさと車を集めるぞ！」

老人の掛け声と共に男数人がそれぞれの自宅に走っていった。こんな田舎の村じゃ車を持つてるほうが珍しいんだな。

……でもこれで助かる段取りはついたし、大阪の方へ近づける……！
——安心だ。

「なんとかかなりそうね。」

加野が言った。

「そうだな。」

麻生は笑って返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2426p/>

アナログ改

2010年12月18日19時17分発行